



陽気なインドネシア人

おおさわ まさあき
大澤 正明

一九四八年北海道生まれ。九四年四月から九六年三月まで、JICA(国際協力事業団)の固形廃棄物処理の専門家として、インドネシア水道環境衛生訓練センターに赴任。現在、(財)日本環境衛生センター西日本支局に勤務。

七月に入ると、地区の行政区長名の文書が配布され、「各戸、家の周囲の清掃に励み、電飾を掲げよ」とのお達しがあった。さっそくわが家も点滅ランプを買ってきて軒先に飾り付けたのだが、街の様子はというと、大きな家も小さな家も例外なく分相応プラスチックの派手さかげんでピカピカやっついている。日本と比べると商業用ネオンライトが極端に少ない薄暗がりの中で電飾が点滅する様は、まるで国全体が歓楽街になったよう落ちて着かないが、気持ちは弾む。

パーティーが好き

結婚式の派手さも並みではない。驚くのは金遣いの荒さだ。近い親戚遠い親戚構わずお金をかき集め、私たち日本人からするとどう考えても分不相応なまでに派手なパーティーに仕上げてしまう。

結婚式だけでなくまだしも、イスラム国家インドネシアには、割礼という大切な儀式もある。一度招かれたその儀式もまた派手だった。主役の男の子は白粉を丁寧に塗ったうえにアイラインまで入れ、

シーなその踊りを場所を構わず男同士が組んでやるのだから、ひたすら明るい。

独立五十周年記念祭

赴任中に独立五十周年を祝う記念行事があった。八月十七日の独立記念日のかなり前からメインロードには赤白の国旗がざらりと並び、「祝五十周年」の横断幕がビルの壁を飾り立てる。

陽気な音楽

南国の人たちは、派手好きで、おしゃべり好きで、お祭り好きだ。たとえ数日前に顔を合わせたばかりでも、奇ると集うと握手を交わし肩を抱き、延々とおしゃべりをする。興に乗ると音楽に合わせて踊る。好みの音楽はダンドット。ひねりの利いた演歌を、軽めに陽気にアレンジしたような奇妙な曲調だ。それに合わせて腕を振り、腰を回す。ちよつとセク

まるで女の子と見まごうほどである。その両脇に控える両親も、パーティー衣装に身を包み誇らしげだ。数十人にも及ぶ招待客は、主役の男児と握手を交わし、肩を抱き、写真を撮り、バイキング形式のごちそうを頂く。招かれる方にとっては楽しくうれしい行事だが、やはり私としては主催者の懐具合を気にしてしまう。

誕生日のお祝いも欠かさない。私の職場では、誕生日を迎えた当人が食事を用意して仲間に振る舞うという習慣があった。用意する食事の定番はHOKKA HOKKA BENTO。中身は日本の幕の内弁当をインドネシア風に味付けしたものだ。この弁当を十人分も買おうと、薄給にあえぐ公務員の給料の数分の一にもなる。悪いなあと思いつながら頂くことになるのだが、周りの人たちは気にする様子もなく、楽しんで振る舞い、楽しんで頂いている。

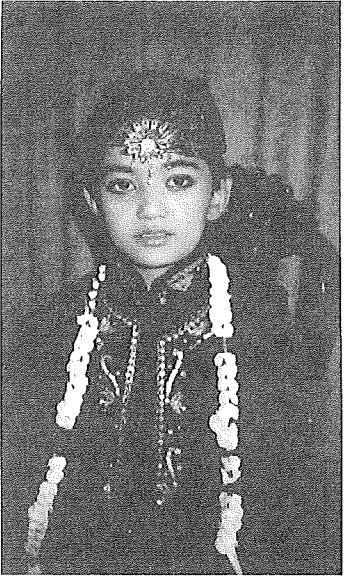
senekuk senekuk

そんなインドネシア人のお祭り好きが頂点に達するのがレバランだ。一カ月に

も及ぶ断食が明けた後のレバランは、日本で言えば正月とお盆を合わせたような大騒ぎになる。都会に働きに出ている者のほとんどが帰省する。当時の新聞によると、ジャカルタ市約九百万人のうち四百万人がこの時期一斉に帰省するのだという。

一度、この帰省ラッシュを車で追い掛けたことがある。ジャカルタから約八〇〇キロの道のりのほとんどが片道一車線の狭い道路。そんな田舎道を時速八〇キロで飛ばす。ちよつとでも油断すると、すさまじいクラクション音とともにバスが追い越しをかける。追い越す車は、さながら対向車との度胸比べ。あやうく正面衝突というところで、さつと自分の車線に戻る。一刻も早くふるさとに帰り着きたいと、そんな声が聞こえてくるようだ。

五〇ccのバイクに二人乗りで数百キロの道を移動するのは当たり前。なかには、子供を間に挟んで三人乗りしたり、生まれで間もない赤ん坊を片手



割礼のお祝いで正装した少年

海外で暮らしてみたら ●大澤 正明